

\* 要旨は資料作成者の主観によるものであり、著者が意図したところを反映しているかどうかは不明です。

1. 福永自身による言及など

No.	タイトル	著者	書名 出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
0	「夜の時間」初出と書誌	—	福永武彦全集 第3巻 附録より 新潮社)	—	1	初出：『文藝』昭和30年（1955）5月号及び6月号。以下書き下し。 単行 1. 「夜の時間」初版。昭和30年7月河出書房刊（河出新書36）。新書判、紙袋、カバーつき。カバー装画 三岸節子。口絵写真1葉。本文202頁。内容：「夜の時間」1篇、及び「附記」著者）。 2. 「夜の時間」私家版。昭和30年7月刊。新書判、紙装（但し初版とは別装）、紙函入。限定50部、番号入。内容は初版と同じ。 3. 「夜の三部作」初版。昭和44年（1969）12月講談社刊。四六判、布装、函入。装丁：著者、序文：著者。 4. 「夜の三部作」限定版。昭和45年（1970）8月講談社刊。A5変型、総皮装、布装帙入。限定500部、番号入。全冊著者署名。内容は3に同じ。
1	「夜の時間」初版附記	福永武彦	「夜の時間」初版（1955年7月） 福永武彦全集 新潮社） 第3巻 附録に所収	1955/07	1 全集)	「夜の時間」は、僕がサナトリウムで寝ていた1948年頃に、既に一部分を構想していたものだが、今年の3月から6月にかけて、僕としては意外に早い速度で書き上げることが出来た。1章から10章まで、及び12章は、『文藝』の5月号と6月号とに掲載され、11章及び13章以後の部分は、ここに初めて発表する。 この作品は、昨年度に僕の書いた「冥府」及び「深淵」と共に、「夜の三部作」と呼ばれるべき中篇のシリーズを形成するものである。それぞれに独立した物語だが、ただいずれも暗黒意識を主題にして、それを三つの違った面から取り扱っている点にのみ、共通点がある筈だ。 作者がこれ以上付け加える必要はないだろう。（全文引用）
2	「夜の三部作」初版序文	福永武彦	「夜の三部作」初版 福永武彦全集 新潮社） 第3巻 附録に所収	1969/10	3 全集)	以上の二つの中篇程度の作品（注：「冥府」と「深淵」）のあとに、私は小型のロマンのようなものを書きたいと思い、そこにやはり人間の内部にうごめいている運命の悪意のようなものを、今度は正面から多視点で扱うことにした。「夜の時間」はその発想に於いて私の療養所時代の空想の産物である。そして暗黒意識という主題はここにも及んでいる筈だから、前の二作に引き続いてこれを書くことに、義務的な喜びをさえ感じていた。 従ってこの三つの小説は、私にとって「夜の三部作」という一つの作品なのである。（引用）
3	福永武彦全小説 第3巻 序	福永武彦	福永武彦全小説 第3巻 福永武彦全集 新潮社） 第3巻に所収	1973/11	3 全集)	療養所にいた頃に私が最も熱心に勉強したのは精神病理学である。略）私はミンコフスキの「精神分裂病」とか村上仁の「精神分裂病の心理」などという本を丁寧に読み、分らないところがあれば岡田さんに質問したりした。（略） 「夜の三部作」については、その都度単行本の後記で説明したから附録を参照してほしいが、これらも精神病理学に基いた作品ということが出来ようか。療養所を出た年に、暮までかかって「草の花」を書き終えると、翌昭和二十九年の一月から二月にかけて「冥府」の前半を書いた。「草の花」が主人公に作者自身のしっぽをつけていたのに対して、ここでは主人公から独立し、謂わば主人公の住む世界の雰囲気や作者の心的状態を抽象的な模様として写し取っているような構図を取った。五月に「冥府」後半、八月から九月にかけて「深淵」、翌昭和三十年の三月から六月にかけて「夜の時間」を書いたが、登場人物たちは次第に作者の精神の或る部分の拡大した図形を描くに至ったように見える。それは私が療養所にいた間に「物を思」ったその「物」が、絶望的に暗かったせいであろう。私は「夜の時間」で次に書べき長編の小手調べのようなものを試み、いずれももっと本格的な「夜」の小説を（しかも「屋」を含んで）書くつもりにしていたが、その作品は昭和28年に一部を発表していたにも拘らず、完成までにあと10数年もかかることになった。（引用）
4	対談「文学的時間について	福永武彦 白井健三郎	「新刊ニュース」277号 1973年11月 対談集「小説の愉しみ」（1981）所収	1972/11	11	福永 「草の花」を書いたときはまるで反響がなかったんだけど、中村真一郎があれを評して、登場人物がみんな善意の人間ばかりだ、そもそも世の中というものはもっと悪意に満ちているんだ、というようなことを言ってお説教を垂れたもんだから、そんなことは百も承知だ、ぼくだって悪意ぐらい書けるんだというところを示すために「夜の時間」を書いたんでしょう。つまり「草の花」で屋を書いたから、今度は「夜の時間」で夜を書く。もっともぼくの場合には、悪意というものが、人間の悪意というよりも、一種の運命の悪意みたいなものになってるんだね。  白井 福永君の作品からいちばん受けるのはドストエフスキーの感じですよ。 福永 ドストエフスキーは、最も熱心に読んだのだからね。その結果、ドストエフスキーにはかなわないっていう気がしちまった。（略） ドストエフスキーの作品を読むと、時間という問題にしても、それまでの小説家とはまるで違った時間が流れていることに気がつく。つまり文学的時間というものは、もうドストエフスキー的な時間以外には考えられないんだね。（引用）

No.	タイトル	著者	書名 出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
5	キリーロフについての小説中の言及と『悪霊』よりの引用	福永武彦	『夜の時間』	1955		<p>奥村の言葉より 「…僕にはまだ結論はない。しかし或る点まではキリーロフと同意見だ。僕には、あの『悪霊』という小説を読んで魂をゆさぶられたとか何とか言いながら、自殺しないで生きている奴を見るとおかしくてしょうがないよ。」</p> <p>【しかしキリーロフは、つまりドストエフスキイの根本思想の一つだろうか？ あの人神の思想を考えついた時に、ドストエフスキイは自殺してしかるべきだったのだ。それにまさる光栄はなかった筈だ。しかしキリーロフが、一番初めに<b>神はない</b>という自覚を持ったことを証明するために、自殺する義務があったのと同じように、ドストエフスキイはこの人神思想を人に伝えるために、<b>生きる義務がある</b>と考えたんだ。これは間違った論理だった。自らを神にするためには、誰もがそれを自分で考え、自分で気がつかなければならないんだ。大事なことは、その思想が借りものでないということだ。キリーロフの根本思想は、<b>神はない、従って自分が神だ</b>、これだけの簡単なことだって、自分が気がつくとなれば大変なことだ。僕なんかは、ドストエフスキイのお陰で、ここのところを公理として受け入れることができるんだからね。」</p> <p>キリーロフの言葉より 「…最高の自由を望む者は、だれも自分を殺す勇気をもたなくちゃならない。そして自分を殺す勇気のある者は、欺瞞の秘密を見破った者です。その先には自由がない。ここにいっさいがあって、その先には何もありません。あえて自分を殺せる者が神です。いまや、神をなくし、何もなくなるようにすることはだれにもできるはずですよ。ところが、だれもまだ一度としてそれをしたものがない」 自殺者は何百万人となくしましたよ」 ところが、いつもそのためにはではない。いつだって恐怖を感じながらで、その目的のためではなかった。恐怖を殺すためではなかった。恐怖を殺すためにだけに自殺する者が、たちまち神になるのです」</p> <p>もし神があるとすれば、すべての意志は神のもので、ぼくはその意志から脱け出せない。もしないとすれば、すべての意志はぼくのもので、ぼくは我意を主張する義務がある。なぜならすべての意志がぼくの意志になったから。……ぼくには自殺の義務がある。なぜならぼくの我意の頂点は、自分で自分を殺すことだから。……なんの理由もなく、ただ我意のためのみに自殺するのはぼく一人なのだ」</p>
		ドストエフスキイ	『悪霊』 江川卓 訳 新潮文庫)	1872		

## 2 単行本

No.	タイトル	著者	書名 出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
1	『夜の三部作』	首藤基澄	福永武彦の世界 審美社)	1974/05	17 第4章)	<p>福永のいいたいことは、『夜の時間』の冒頭の一節にすべて内包されているといっても過言ではない。これを看過すれば、真の主人公が奥村次郎ということになってしまう。私はこの冒頭の一節を重視し、『夜の時間』における福永の意図が、奥村像の造型にではなく、不破と文枝における奥村体験の闡明(せんめい)にあったと考える。福永はこの小型のロマンの試みで、不破・文枝の間に冴子をおき、現在の『時間の夜の中』の彷徨と、その現在を決定づけている過去の意味を明らかにしようとしているのである。不破は文枝に向かって、過去というものが恐ろしいのは、その事実によってではなく、その事実が僕らの意識に与える影によってなのです。健全であるべき意識が、過去の事実のために暗黒にされて残る、その意識が僕らの敵なのです。」といい、過去の頸枷(くびかせ)を取り去ることになる。愛し合う二人が、こうした地点に到達するプロセスが、『夜の時間』の面白さであるといわねばならない。</p> <p>奥村は、愛は「精神の燃焼作用」ではなく「行為」だと考えて(『草の花』の夕見の場合、明らかに「精神の燃焼作用」の方にポイントを置いていた)、己れの思想(観念)に殉じたが、絶対自我を捧持する者には、相対的な視座の入りこむ余地などどこにもない。福永は不破、文枝という善男善女により、青春における絶対的なもの、固定化したものを問い直し(戯画化し)、現在の閉ざされた『夜の時間』に穴をあげようとしたといっていると思う。つまり、青春への訣別を無残な体験を背負うことによって行っているのである。 引用)</p>

3. 文芸関連雑誌

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	福永武彦における<暗黒意識>	清水徹	国文学 17巻14号 1972年11月号 特集 福永武彦	1972/11	8	内部に孕まれた<死>、孤独・挫折・絶望の源泉、錯乱・狂気の心的な場の三者を福永は<暗黒意識>の名の下に統一的に把握する。類同物をたどるように<暗黒意識>の範囲をひろげてゆくことにより、かれは、生を生きるときの心的状態をいわば逆光の下に浮かび上げさせるような装置を手に入れるのである。言いかえれば、かれは、<暗黒意識>を裏返す鏡を磨き上げ、これに生の姿を映し出すことにより小説を創造してゆくのだ。 『冥府』において<暗黒意識>の観念が定立されたことの意義は大きい。たとえば『風土』は歴史的な枠組みを取りこんだ芸術家小説という堂々たるロマンの構図を示しながら、芸術家の孤独、日本と西欧との芸術的風土の差異、死の想念、愛の挫折などの内部主題を支え相互にかみあわせる共通の基盤が薄弱の感を免れなかったし、『草の花』の場合も、そこにおける愛と孤独の主題は抒情的感傷性にあまりに染められていた。<暗黒意識>の観念の定立は、そうした福永武彦の恒常的テーマを内面化された<死>の深みへと根づかせ、生の根源にかかわる作中人物たちの姿を浮かび上げさせるのに大いにあずかって力があるのである。引用)
2	福永武彦の魅力 悲しみの文学	加賀乙彦	国文学 解釈と鑑賞 第47巻10号 1982年9月号 特集 福永武彦	1982/09	4	『夜の時間』の語りの巧さは無類だが、キリーロフ風の超人志向の自殺者が、死と愛のはざまに、ぎりぎりにも生きている様子が描かれている。『夜の三部作』のなかで、この小説がもっとも深く死を凝視している。 福永武彦の小説では死は恐怖よりも悲しみとして現れている。どの小説にも、死への諦念とそのような死を含む生の悲しみが充ちていて、まるで悲しみの文学とでも言うべき世界が表現されているのが注目されるが、それを典型的に示したのが『夜の三部作』といえるだろう。
3	『夜の三部作』	栗坪良樹	国文学 解釈と鑑賞 第47巻10号 1982年9月号 特集 福永武彦	1982/09	8	『夜の時間』は、<人は誰でも過去を忘れて生きている。以下略>という、まさしく作者自身の観念がむき出しに露出された一節から始められる。要約して言えば、<時間の潮流が>、人間の<本質的な部分>を押し流していつてしまう、あるいは<瑣末な日常の繰返し>が、人間の<本質的な部分>を押し流していつてしまう、という青くさい思想だけが見えている。病院のベッドの上で眺めくらした不安居士の福永武彦が書いた一節であることを加味したその上で読むにしても、すでに、これから始めようとする物語をこのしり顔なご託宣が壊してしまっていることは確実なことである。 案の定、『夜の時間』は、かくの如き竜頭をつけた蛇尾の如く展開する。いくら、面白く、おかしくドラマを作り出そうとしても、時の流れが、人間の<本質的な部分>を押し流すことだけが際立ってしまっ、しかも、<本質的な部分>が押し流されることを、しり顔に作者自身が邪魔をして、ついにこの小説は通俗小説にすらなり得ていない。引用)

4. 新聞、文庫/全集 解説他

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	『夜の時間』	佐伯彰一	日本読書新聞 1955年9月5日号  日本文学研究資料叢書 矢岡昇平 福永武彦 (1978) 所収	1955/09/05	1 再録時	漱石の『こころ』との類似と対照： 類似)死者の影の下からいかにして抜けだすかという主題。真のドラマは、生者の間でより、死者と生者との間に起る。対照)『こころ』の主人公が、みずからの過去のうちに見出して苦しむエゴイズムは、ここではすべて自殺した死者のうちに投げ込まれている。要約)  『冥府』において、いわば死者の眼で生をとらえるのに成功した著者が、今度は逆の試みを取り上げたのは自然な成行きには違いない。だが、このススキなく仕立て上げられた物語にはいかに作者の手付きが見えすぎすぎる。作中人物は、作者が彼らに見せることを欲したものだけしか見ない。読者の方が彼らの気づかぬものを見抜いてしまう。肯定と出発の物語につきまとう困難さであろうか。霧困気の盛り上げに巧みで、人間同士のぶつかり合うドラマには不得手な氏の詩人的な資質の故であろうか。氏の抒情的なサワリは、とすると歌の方に流れがちだ。こういう主題こそ、もっと重い日常性のごたえのひきしめが必要だったという気がする。引用)

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
2	眞府・深淵」解説	寺田透	眞府・深淵」初版の解説文 1956年3月大日本雄弁会講 談社刊 「ミリオン・ブックス」の一巻  日本文学研究資料叢書 矢 岡昇平 福永武彦」(1978)所 収	1956/03	2 再録時	<p>深淵」の女性の言葉 私は、一体私の犯した罪とは何だろうかと考えました。私のように、私自身の意志のないところでそれを犯した者も、それはやはり大罪に数えられるのでしょうか。罪を犯したのは私でなく彼なのです。それなのになぜ、罪の傷痕は私にばかり深いのでしょうか。」これは泡鳴の刹那主義と、ドストエフスキーの人神の思想と、愛欲の罪悪性に関する漱石の思想の異様な混合を示す「夜の時間」の主要テーマとなっている。</p> <p>と云えばすでに察せられるだろう、深淵」の「己」が、著者の思想の他の一項であることが、「己」は、インテリになれば「夜の時間」の奥村次郎に等しい、独存自我の生命の刹那的燃焼」泡鳴)の具体化である。</p> <p>そして「己」の生き方の対偶は、あの「眞府」を形作る。死が直ちに新しい生への門出であるような生とはどんなものでなければならぬか。そうでないような生は、生きながら眞府にあることではないか。— と云えば、この問いが直ちに「夜の時間」の奥村「哲学」に連ることが分るだろう。</p> <p>読者は「眞府」と「深淵」を通して、「夜の時間」に行くべきである。</p> <p>著者はこの三作を「暗黒意識を主題にした三部作」と呼ぶのだが、僕にしてみれば、それはより適切に人間の意志や感情ばかりでなく、思考や行為まで支配するその内部の意識されざりしもの、それを己に即し、また作中人物に即して造形しようとした三部作と改称されるべきものだという風に思われる。引用)</p>
3	夜の三部作』について	長田弘	夜の三部作」講談社文庫 (19719月初版)解説 福永 武彦の文学」より	1971/08	10	<p>福永が書く「人間を内面から動かしている眼に見えない悪意のようなもの」とは、それを逆転していえば、みずからなしたのではない行為においてさえ、人はどのようにも無垢でも無実でもありえない有罪性の意識としてひとりの人間の上にはたらくものの謂であるであろう。</p> <p>奥村の自殺は、突きつめていえば奥村のただひとつの願望、僕は自分を神にするという意思のもとに、行為者としての自分を選択した」という、いわば自分で「自分の生に立ち会うこと」という願望の、窮極的な表現なのである。それゆえに、「夜の時間」の奥村は、「深淵」の「己」は、インテリになれば「夜の時間」の奥村次郎に等しい、「独存自我の生命の刹那的燃焼」の具体化」(寺田透)というよりはむしろ、罪を犯したのはわたしでなく彼なのです。それなのに、なぜ罪の傷痕はわたしにばかり深いのでしょうか」と問いかける「深淵」の「わたし」のまさに裏がえされた表現なのだ。</p> <p>死者は、生きるものにとってもっとも完璧な他者であり続けることを、けっしてやめはしないのだ。自殺者への「痛恨と羨望との入り混じった一種の感情」をみずからの生きるという行為をとおして「ひとはなぜ自殺しないで生きることができないか」というふうに関わかれ、生を死にいたるまでひきのばされた自殺として生きることによって、福永が「夜の三部作」をつらぬくモラルを「独存自我の生命の刹那的燃焼」泡鳴)といったものからきびしくへだてているということ— そのことをこそ、わたしたちが「夜の三部作」に読まなければならない理由はそのこにある。引用)</p>

## 5. 大学研究紀要、その他研究録

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	夜の時間」論 —「恐怖」から「不安」へ—	鳥居真知子	福永武彦研究 第3号	1998/01	9	<p>本論は、「夜の時間」を、その同時期に流布し始め、福永も影響を受けたサルトルの「実存主義」哲学における「即自存在」、「対自存在」、「対他存在」等を考慮に入れて、考察している。</p> <p>冴子は、彼女の中の「もう一人のあたし」と向き合い、主体的に自己を凝視する者」となることにより、「即自」の否定である「対自」となる。それは「運命の悪意」に封じ込められ、「びくびく呼吸している単にあるもの」ではなく、未来に向かって「決断と選択との中に」自己を投げ出す者」である。この「未来」への「可能性」こそ、冴子の「不安」の「源泉」なのである。</p> <p>「不安」は「実存主義」において、「自己投企」の鍵を握る、重要な意識である。福永はその「不安」に注目し、実存主義的方法を用いて、冴子の内面を描き出した。</p> <p>福永は「夜の時間」において、「人間を内面から動かしている眼に見えない悪意のようなもの」である「暗黒意識」を、「運命の悪意」という観点から描こうとした。「暗黒意識」が「運命」の不条理性の中で表されている。奥村は自己を神に変えることで、また文枝は他者の手によって、そこから逃れようとした。彼らは人間として自らの手で、立ち向かっていこうとはしなかった。彼らにとって「運命の悪意」は、「恐怖」でしかない。略)そこには、未来に向かって「自分自身による可能性」はない。</p> <p>しかし、冴子における「不安」は、「暗黒意識」に連なる意識ではない。この冴子の「不安」に満ちた内面は、後に挿入された11章を境にクローズ・アップされ作品の最後を締め括る。福永は、この後半を一気に単行本に書き下ろした。それは「夜の三部作」全体を締め括るものである。福永は、人間を呪縛する「暗黒意識」を主題とした「三部作」の最後において、それに対抗する「不安」という、人間の「主体的」な反作用の意識を提示したのである。この「不安」は、人間が「自由な主体」として、未来の中に自己を投じていく中から生まれ出てくるものである。</p> <p>「夜の時間」は、まさに「実存主義」的な「哲学を持つ」、戦後日本における新しい「二十世紀小説」と言えるのである。引用)</p>